

進捗状況の概要（1 ページ以内）

【学内の実施体制】

◎「AP 推進委員会」を中心とした事業推進

→平成 27 年度 4 月に発足した AP 事業推進責任者の副学長を委員長とする「AP 推進委員会」を中心に AP 事業を推進している。委員会は月 1 回程度開催し、テーマ I・II を推進する各運営グループ長より進捗状況等の確認が出来る体制を整備している。その他、シンポジウムや勉強会の企画、他大学からの視察対応なども行った。

【中心となる取組】

◎「反転授業型アクティブ・ラーニング」の取組

→平成 29 年度は、平成 27 年度及び平成 28 年度に作成・改良した教材及び自己調整学習支援システムを活用して反転授業型アクティブ・ラーニングを一般化するとともに、Web 上での予習復習サポート・ソーシャルラーニング機能を活用した協働学習を本格稼働させた。合わせて学生調査も実施し、授業方法の有効性やシステムの機能についても検証した。また、各学科の授業実践及び教材作成状況の聞き取り調査をもとに、授業デザインと教材のリポジトリの基礎作業を進めた。

◎「学修成果の可視化」の取組

→平成 29 年度は、前年度に実施した企業調査の分析を行い、大学で身につけた能力と卒業後の関係を把握した。また、入学時と 3 年生時に汎用的能力を測定する外部テスト（PROG）を実施し、勉学以外での学生の成長度を把握するなど、学習成果の可視化の取組を進めた。

【取組の成果】

◎「反転授業型アクティブ・ラーニング」の取組成果

→ソーシャル・ラーニング・システムを用いた小グループでの学習では、学生が自主的に情報交換や意見交換などを行う姿勢が見られ、授業内のグループ活動でもグループ内で問題解決をする場面が多く見られるようになった。また、授業外学習の課題の内容確認テストを授業開始時に行うことで、課題への取組をきちんと行う習慣が身についた。授業外学習と授業内学習の内容を関連付けることにより、学生の課題に対する知識が深まり、自分の意見をまとめて伝える力が身についた。

◎「学修成果の可視化」の取組成果

→これまでに蓄積した学習成果のデータや学内に存在する学生に関するデータを IR 用に構築したデータベースに一元的に蓄積し、学習成果のデータを他のデータと結合して分析するための基盤を構築した。学科や入試方式など基本的な区分間での比較・分析ができるようになった。

【補助期間終了後の継続発展に向けた取組】

◎「反転授業型アクティブ・ラーニング」の取組

→補助期間終了後も作成した教材等を広く授業で活用できるようリポジトリの作成に取組んだ。

◎「学修成果の可視化」の取組

→AP 事業で構築した可視化システムを大学の IR システムに取り込み、包括的なエンロールメント・マネジメント体制の整備に取組んだ。

【学内外への波及効果】

◎「京都外国語大学 AP シンポジウム (3/8)」の開催及び「AP 研修会[勉強会] (9/13・1/31)」

→AP テーマ II にあたる「学修成果の可視化」に対する取り組みや成果を中心に、他大学の取組事例も交え、「学修成果の可視化」について報告を行った。また、パネルディスカッションを通し、今後の AP 事業推進に向けた議論も行った。このシンポジウムに、学外・学内関係者約 60 名の参加があり、日本私立大学協会の『教育学術新聞』にも取り上げられ、本学の取組が幅広く発信できた。その他、外部講師を招聘し、アクティブ・ラーニングに関連する授業デザインや指導方法を中心とした学内研修会（勉強会）を 9 月の宿泊 FD 及び 1 月に実施した。